

特集「瀬戸内の塩が育んだ 近代東アジアネットワーク ― 児島、野崎家に集った 「人」と「書画」―

特集 「瀬戸内の塩が育んだ近代東アジアネットワーク ——児島、野崎家に集った「人」と「書画」——

序

遊佐 徹

本特集は、岡山大学大学院社会文化科学研究科に所属する遊佐徹（社会文化科学研究科教授・中国文学）、土屋洋（社会文化科学研究科准教授・東洋史学）が中心となって2014年度以来推進してきた「野崎家研究プロジェクト」の3年目の研究活動に基づいて企画されたものである。

これまで、私達は「岡山の塩業家野崎家が形成した近代東アジアネットワーク——塩・人・書画——」の総合タイトルのもと年度ごとに焦点を絞った研究テーマを設定して研究を進め、さらに年度末にシンポジウムを開催する形で研究の総括と公開を図ってきたが、2016年度は上掲特集タイトルのごときテーマを掲げ研究活動を展開してきた。その趣旨は以下のようなものである。

野崎家は、倉敷市児島の地において江戸の末期以来塩田を拓き、明治を経て現在もなお事業を継続してきた塩業家であるが、実はこの野崎家には、グローバルな視点に立った時に見えてくるもうひとつの重要な「顔」がある。それは、近代東アジア交流に果たした結節点としての役割である。そこには文廷式や張謇といった清末の中国で活躍した政治家、実業家が児島、そして東京麹町の邸宅を訪れ、犬養毅や近衛篤磨等と交流している点に象徴されるようなこれまで注目されてこなかった興味深い「人」的ネットワークの存在を指摘できるとともに、「人」的交流のなかで交換された詩文が近代日中文学交流史上の重要な資料となっていることをもって、それを文化の観点から捉えなおすことも可能である。そしてさらには、来舶画家、交流した中国人がもたらした書画のコレクションの存在を加えたとき、瀬戸内海地域が近代において豊かな東アジア文化ネットワークの担い手となっていたことが明らかになってくる。本研究は、野崎家を核とする「人」と「書画」の交流の分析を通じて、瀬戸内海地域が近代東アジアネットワークの形成に果たした役割を明らかにすることを目指すものである。

この方針は、相互に関連する3つの研究活動をもって具体化されることになった。その1つ目は、野崎家に赴いての調査で、野崎家塩業歴史館の支援を受けながら主要収蔵品の実地調査や収蔵品の伝来過程の考察を実施した。2つ目は国内外の東アジアネットワーク資料所蔵施設における調査で、上海図書館、上海博物館、国会図書館をはじめとする諸機関において文献資料を中心とする資料閲覧と収集を行った。そして、3つ目が2016年度研究活動のメインであるとともに、3年にわたる野崎家

特集 「瀬戸内の塩が育んだ近代東アジアネットワーク —— 児島、野崎家集った
「人」と「書画」——」序 遊佐 徹

研究プロジェクトの集大成ともいいうる年度研究テーマをタイトルに冠した国際シンポジウムの開催（2017年3月15日、於岡山大学）で、国内外より5名の専門家を招いての野崎家の書画コレクションの概要、形成過程、それに関わった人物、特長ある作品についての分析、解説といった内容の報告により、私達が目標とするグローバルな視点に立った野崎家研究の可能性、必要性を改めて主張するとともにその重要性を海外にまで発信することができたのであった。以下に記したのは、シンポジウムでの報告内容、報告者の一覧である。

1、近代日本の中国書画収蔵におけるネットワーク

弓野隆之（大阪市立美術館・学芸課長代理）

2、野崎家コレクションの中国書画にみる近代の交流

古川文子（岡山県立美術館・学芸員）

3、野崎家における王冶梅の画業

呉孟晋（京都国立博物館学芸部・主任研究員）

4、異国の風景を描いた清人画家——沈桂「亀鶴坳詩画冊」と島津重豪——

塚本鷹充（東京大学東洋文化研究所・准教授）

5、羅振玉と日本

呂順長（浙江工商大学東方語言文化学院・教授）

——報告順、敬称略

本特集は、その際の報告をベースに企画されたものである。この場を借りて、お忙しいなか貴重な報告を賜わり、また文章化の労をお執りいただいた報告者の皆様方に厚く感謝申し上げます。また、2016年度の研究活動においても野崎家および野崎家塩業歴史館のご理解とご協力を賜りましたことにつきましても改めて感謝申し上げます。

〔付記〕本研究の推進および国際シンポジウムの開催に当たりましては、公益財団法人福武財団による「2016年度瀬戸内海文化研究・活動支援助成」を受けました。